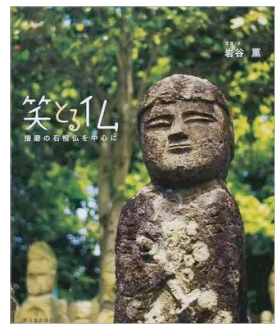
司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでもらいたい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、中川 明神父様（明石教会）が担当。

中川 明神父から この一冊



『笑とる仏　播磨の石棺仏を中心に』（岩谷薫著、2011年、西日本出版社、税込2530円）

これは、播磨（はりま）地方の日常の片隅に佇む石仏の写真集で、写真の鑑賞より、石仏を訪ねる際のガイドブックとして、紹介します。昨年、本に紹介される百体近くの石仏のうち8割くらいを訪ね、深い感銘を受けたからです。

古いものは鎌倉時代にまでさかのぼれるという石仏の多くは、捨てられたようにひっそりとあります。小さな集落の裏山の雑木林にある小さな墓地には、キリシタン地蔵もありますが、石段の痕跡をとどめ、目的の石仏は草むらで傾いていました。

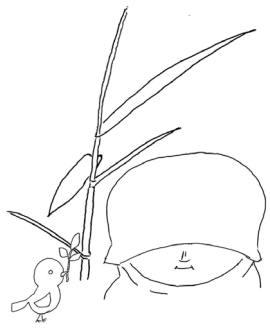
ある薬師堂の石仏は、とても大きな石板で、二つに割れ、お堂の横の大きな木に立てかけてあり、そのまま長い年月が過ぎたようで、木が成長し、二つの石板を幹が抱え込んでいます。

ある寺は辺ぴな山の中にあり、車がやっと通れるほどの道を、車を傷つけまいとしながら、ドキドキしながら行くのです。こんな場所に本当に寺はあるのかと、不安で心がいっぱいになり、それでも辛抱して車を進め、しばらくすると、目の前が急に開け、お寺の敷地です。とても静かで、裏山に水子（みずこ）供養（くよう）のお地蔵さんが、びっしりと並んでいたりもします。

ぎっしり並んだ水子地蔵の間に、たくさんの赤い風車が回り、イヌやクマのぬいぐるみも横たわっています。水子地蔵は赤い帽子を被り、その中のひとつが帽子を目深に被っていて、とても愛らしく、目に留まりました。きっと、その時、母親が目深に被らせたのです。そして、この水子地蔵のこの表情に注ぐ女性の目は、涙に濡れていたのです。彼女は未だに、目深に帽子をかぶる水子地蔵のこの表情を心の奥に秘めているかもしれません。

草むらの石仏の前に立つと、ここにたたずみ、祈った無数の人の悲しみの心が、何百年もの時間の流れのなかでつながっていて、その「いのちの流れ」の中に私もいると実感します。この本は、そんな「流れるいのち」へのガイドブックです。

次回は、和越（かずこし）敏（びん）神父様（コンベンツアル聖フランシスコ修道会、仁川教会）です。



今回の2つのイラストは、中川神父様が描かれました。ありがとうございました！

ラジオ

信仰の時間

創造主である神

〈8月7日放送分〉

崔周永（チェジュヨン）神父
（教区本部事務局長・八尾教会主任）

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」。（創世記1・1～2）

皆さん、美しい地球はどうやって出来たのでしょうか。創世記1章では、神による創造の手前の状況を上の文章によって描いています。さっと読んでしまえば、何の緊張も感じとれないかもしれないでしょうが、もっとゆっくり味わいながらもう一度読んでみましょう。

「初めに」というのは、神様の創造によって始まった時間のことです。存在するものがなければ時間もなく、すべては停滞しているのです。永遠の眠りのような感じでしょうか。

「神は天地を創造された」――どうやって創造されたのだろうかと好奇心を抱きます。詳しいことは後に出てきます。今は創造手前の状況の描写が続きます。まず、「地は混沌であって……」と。今はGoogle（グーグル）で地図検索をすれば、衛星写真まで見えるし、道路や建物、他にたくさんのものが、特に人間が造り上げたものが見えるのですが、創造の前はそのようなものは何一つなく、ただただ混沌の状態でした。どういう状況が「混沌」でしょうか。

例えば、神との出会いの前、私は自分勝手に生きていました。心は乱され、自分を動かしているものが一体何であるかということも考えたことがありませんでした。いいえ、考える力がなかったというほうが、より適切でしょう。激しい情念に振り回されっぱなしの小僧でした。意志、判断、感情、情念、欲求などなど、数ある内面の要素がごちゃ混ぜになっていました。

「**闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた**」とあります。皆さんは水泳が得意でしょうか。全然泳げない私にとって、水は恐怖そのものです。ここで描かれている水は底を知るすべもない深淵のことです。そこから何かが突然飛び出して来るかもしれない、人間を脅えさせるほどのものでしょう。しかし、このように圧倒的な威力をもつ水に対して神の力が及んでいることが分かります。そこに何か動いているものがあります。そうです、神の霊です。「恐れることはない」と言わんばかりに私たちを慰めてくださっているようです。

静かな雰囲気は一気に、一変します。「**光あれ**」。命令形の言葉です。神様の命令どおり、光が現れます。つまり、何もなかった状態から光が突然出来たわけです。そのダイナミックな動きが感じ取れるでしょうか。

「**神は光を見て、良しとされた**」――「まあまあ、いいか」とか「悪くないね」とかではなく、「良し」とされました。本物だからでしょう。神はこのように良いものを私たちのために創ってくださったのです。次々と他のものが創られていきます。大空が現れ、乾いたところが姿を現し、草や果樹が生えてきます。

ここの箇所をよく見ると、面白いことに気付きます。「**天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ**」という神の命令に対して、「**そのようになった**」と書いてあります（9節）。この文章の構造は31節まで、つまり創造が続く間、繰り返されます。まるで、素晴らしい芸を披露している芸術家のそばで、「素晴らしい。実に見事だ」などの歓声を上げているようではありませんか。

この胸のときめくパフォーマンスは2章1節になると、ぴたりと止むのです。

「天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された」。

先までの力強くダイナミックな働きが、はっと息が止まるほど感動的な神の働きぶりが、一瞬のうちに止まります。そうです。「休み」です。私たちが月曜日から、火水木金……とバタバタと働くような感じから、金曜日の夜からはのんびりと休むようなものです。

へええ、神様も休まれるのですか、と驚かれるかもしれません。私たち人間は生きていくためには働かなければなりません。しかし、全然休まず働きっぱなしだったら、疲れ果てて大変なことが起こります。「過労死」がその一つでしょう。人間は働かなければならないのですが、一方、休まなければなりません。その根拠をこの「神の休み」から取っています。一説によると、エジプトで奴隷生活を強いられたユダヤ人たちの経験が反映されているそうです。

とにかく休むことは大事なことである、ということです。

毎週日曜日 5：50～6：00AM 放送
10月担当： Sr 戸村晴美
ABC ラジオ（朝日放送）AM1008/ FM93.3
スマホアプリの radiko（ラジコ）でも聴けます。